

学位論文要旨

教育のための「身体感性論」の研究
— 「改良主義」と身体的「実践」に着目して—

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 学習開発学分野
学習開発基礎・支援領域

D163872 藪 芝允

I. 論文題目

教育のための「身体感性論」の研究
－「改良主義」と身体的「実践」に着目して－

II. 論文目次

序 章

第1節 問題の所在と研究の目的

第2節 先行研究の概観

第1項 身体感性論について

第2項 身体感性論と教育について

第3項 まとめ

第3節 研究の方法

第1章 プラグマティズムとしての身体感性論

第1節 プラグマティズムの系譜

第2節 身体感性論におけるジョン・デューイ

第1項 シュスターマンによるデューイの伝記的理解

第2項 身体感性論の系譜におけるデューイ

第3項 身体感性論の枠組みにおけるデューイ

第3節 身体感性論におけるウィリアム・ジェームズ

第1項 シュスターマンによるジェームズの伝記的理解

第2項 シュスターマンによるジェームズプラグマティズム解釈

第4節 身体感性論におけるラルフ・ワルド・エマソン

第1項 身体感性論におけるエマソンの位置

第2項 身体感性論の志向とエマソン

第5節 まとめ

第2章 身体感性論の改良主義 (meliorism) と教育

第1節 教育における改良主義

第1項 本研究における改良主義について

第2項 優生思想

第3項 啓蒙主義

第2節 身体感性論における改良主義

第1項 改良主義の辞書的な意味

第2項 身体感性論の原理としての改良主義

第3節 教育における新しい改良主義の可能性

第1項 新しい改良主義の前提

第2項 中村敏雄の学校体育論

第4節 まとめ

第3章 身体感性論の歴史的実践例

第1節 ^{フアラ}花郎について

第 1 項	身体感性論と花郎
第 2 項	花郎の概要
第 3 項	花郎の実践原理
第 2 節	風流道
第 1 項	風流道について
第 2 項	風流道の美学
第 3 節	相悦歌楽
第 1 項	花郎の歌楽の実践内容
第 2 項	花郎歌楽の意義
第 4 節	遊娛山水
第 1 項	花郎の巡遊の実践内容
第 2 項	花郎巡遊の意義
第 5 節	まとめ
終 章	
第 1 節	研究のまとめ
第 2 節	今後の研究課題
参考文献	

III. 論文要約

序 章

第 1 節 問題の所在と研究の目的

教育の問題の多くは、身体の問題であるということが、本研究の前提である。しかしながら、教育における身体は、「心-身体」「知識-身体」「精神-身体」など二項対立の図式において扱われる傾向が根強い。このような身体を一方向的に捉える図式は、「知識-経験」「勉強-遊び」「知識-態度」などといった、更なる二項対立図式を生み出し、深化させる可能性がある。従って、本研究は、教育における身体へのわれわれの認識を改め、そこから教育や教育問題をみるための手がかりとして、「身体感性論 (somaesthetics)」に注目する。

アメリカの哲学・美学者、リチャード・シュスターマンが提唱する「身体感性論」は、物理的身体、感情における身体、知における身体など、身体を幅広く捉えており、プラグマティズムを思想的背景とする理論と実践両方に関わる学問である。身体感性論は、人間を身体的存在として捉え、身体を通してその生き方を向上させることを目指している。

身体感性論の視点から教育を批判的に検討することで、教育そのものを問い直し、教育の在り方に提言をすることが、本研究が目指すところである。本研究の目的は、プラグマティズムとしての身体感性論の内容を明らかにし、身体感性論の主軸である「改良主義」と「実践」に着目し、「改良主義」の軸から身体感性論と教育の相補性を明らかにし、「実践」の軸として身体感性論の教育的具現の例を歴史的に探ることである。

第2節 先行研究の概観

身体感性論に関する先行研究として、シュスターマンの著書四冊－*Practicing Philosophy*、*Pragmatist Aesthetics* 第2版、*Body Consciousness*、*Thinking Through the Body*を取り上げた。それぞれの著書を検討することで、身体感性論の提案→体系→具体→拡張の成り立ちが確認された。これら先行研究の検討からは、身体感性論そのものの理解に加え、身体感性論を成立させたプラグマティズム思想との連動を把握する必要性が見出された。

身体感性論と教育を結びつける研究は、特定の教科や領域に限定されているものが多くを占める。また、身体感性論における「身体」は、他者や社会を排除するものとして曲解される場合も確認された。また、シュスターマン自身の研究においても教育というコンテクストは十分に扱われたと言い難い。その中で、樋口聡(2005)では、身体感性論が思想と教育の架け橋となる可能性が示唆されている。これらの先行の研究を受けて、本研究では、教育全般を問題として取り上げ、身体感性論という理論と、教育という実践の間に架橋することを目指し、教育への発展的な提案をすることを目標とする。

第3節 研究方法について

研究の目標を達成するために本研究で取り組むべき課題は以下の三点である。すなわち、プラグマティズムとしての身体感性論の内容の解明(第1章)、身体感性論の「改良主義」の軸から見える身体感性論と教育の相補的關係についての考察(第2章)、そして、「実践」の軸から見る身体感性論の教育的具現の例(花郎)の歴史的探究(第3章)である。本研究の方法は、文献を使つての哲学的・歴史的探究である。

第1章 プラグマティズムとしての身体感性論

第1節 プラグマティズムの系譜

第1章では、身体感性論とは何かを、プラグマティズムという思想のコンテクストにおいて明らかにした。シュスターマンは身体感性論を通して、プラグマティズムの思潮を受け入れ継承していて、身体感性論のプラグマティズムとしての特性を明らかにする必要がある。身体感性論は、哲学や美学研究を始めとして、様々な分野との学際的研究を行なっている。一方、身体感性論はデューイの思想を中心に置き、ジェームズやエマソンのプラグマティズムを参照しながら、新しいプラグマティズムを実践しているものでもある。

第2節 身体感性論におけるジョン・デューイ

身体感性論の系譜、つまり、分析美学からプラグマティズム美学へ、さらに身体感性論への思想の展開におけるデューイの影響は決定的である。シュスターマンは、自身の学問的出発点であった分析美学の限界に直面し、その突破口として、デューイの思想における芸術の定義に注目する。芸術は「経験」であるといったデューイの芸術理解が、分析美学からプラグマティズム美学(*pragmatist aesthetics*)への転向のきっかけとなった。また、デューイの思想と「経験」概念は、プラグマティズム美学から身体感性論への発展の契機でもある。シュスターマンは、デューイの経験概念の直接的性質に注目し、非論弁的・身体的経験に焦点を絞る。シュスター

マンは、身体的経験を哲学の実践に属させるべきとし、身体感性論を登場させている。また、シュスターマンの身体感性論とデューイの思想の枠組みにおける並列性が、身体訓練 (bodily discipline) の実践、「経験」と「身体」、バックグラウンドとフォアグラウンドの往来の三点において見られた。

第3節 身体感性論におけるウィリアム・ジェームズ

シュスターマンが、ジェームズの生き方や思想において注目するところは、「身体」と「美学」である。シュスターマンは、ジェームズの *The Principles of Psychology* を取り上げ、そこにおける「身体」に注目し、身体の要素の記述を抽出している。

また、シュスターマンは、ジェームズの *The Principles of Psychology* の美学的側面に光を当てることで、プラグマティズムのテーマを見出している。シュスターマンはジェームズ・プラグマティズムの核心的なテーマを ①身体的自然主義 (somatic naturalism)、②身体と社会、文化との連続性、③実用の意味、④美的経験の性質、の四点においてまとめていて、身体感性論の考え方を補強している。

第4節 身体感性論におけるラルフ・ワルド・エマソン

身体感性論におけるエマソンの思想は、その源流を占めるとともに、方向性を提示している。エマソンを主な対象として取り上げたシュスターマンの文献のほとんどは、「いかに生きるか」という身体感性論が赴くべき方向性と関連づけられる。それは、シュスターマンが身体感性論を通して掲げる「生きる技芸」「哲学的な生き方」についての問いであり、「哲学を实践する」試みそのものである。

第2章 身体感性論の改良主義 (meliorism) と教育

第1節 教育における改良主義

第2章では、改良主義を接点として身体感性論と教育を重ね合わせ、教育における改良主義を批判的に検討し、新たな改良主義の方向を提案することを試みた。

本研究における「改良主義 (meliorism)」という用語は、二つの文脈において使用される。一つは、身体感性論の原理であり、もう一つは、教育の根源的な性格である。後者の文脈に関連し、より良さへの信念が招いた教育における副作用として、優生思想と啓蒙主義が挙げられた。

優生思想は、「優れた」遺伝子は残し「劣った」遺伝子は排除することで人類の改良と発展を導くといった思想である。戦前の優生学と教育学の関係は、優生学の立場から教育を啓蒙しようとしたものであり、教育学は、優生学という新しい「科学」の台頭から生じた軋轢により、優生学が作り出した図式に自らをはめこんでいった。優生思想の教育的問題は、「新優生学 (new eugenics)」など、現代にも続いている。優生思想とこれに伴う諸問題は、それを可能にさせる思考の枠組みである改良主義の次元で問い直す必要がある。

啓蒙主義は、ヨーロッパを舞台にルネサンスを起源として 17、18 世紀を中心に起きた思想・社会的変革である。一般的にいわれる啓蒙主義の問題は、当初の人間理性への追求と人間解放の宣言とは裏腹に、人間性の喪失である。教育は、啓蒙主義に裏付けられ、「文明-野蛮」「上品さ・洗練-自然」「教育-無知」の区分けが孕む暴力性を問題として抱えている。この意味で、啓蒙主義は、現行の教育でも続いている目標達成型・管理型教育という副作用を生じさせたといえる。

第2節 身体感性論における改良主義

シュスターマンが敢えて改良主義（meliorism）と命名している身体感性論の原理をより鮮明にさせると、第一に、身体感性論における改良主義は、身体的経験の質の向上を示すものである。対象となる身体的経験とは、一般的に考えられる日常的な動きやスポーツや芸術のパフォーマンスから、思考や生き方にまで拡張され得るものである。また、向上の方法は自覚的な身体意識である。第二に、身体感性論における改良主義は、行為化する（actualize）ための折衷である。この折衷は、両極端の適当な中間地点での安易な妥協ではなく、現状の解釈を踏まえた行為を促すプラグマティズムの姿勢である。

第3節 教育における新しい改良主義の可能性

身体感性論の改良主義を手掛かりに、教育の改良主義の方向への提言が考えられる。それに先立ち、教育における改良主義の排除不可能性を自覚することが求められる。教育の改良主義は、社会的条件により、多様な形で発現されると考えられる。その具体例として優生思想と啓蒙主義が挙げられた。

身体感性論の観点からみられる教育の新たな改良主義は、第一に、身体的経験をその主軸とすることが求められる。第二に、教育における改良主義は、ペシズムとオプティミズムの折衷であることが求められる。教育における改良主義は、現状をペシズムに陥ることなく受け止め、それを改善していく行為でなければならない。それは、まったく新しい何かの創造というよりも、日々の教育実践にすでにその鍵が潜んでいるものである。

第3章 身体感性論の歴史的教育実践例

第1節 ^{フアラシ}花郎について

第3章では、「実践」を媒介に、身体感性論と教育を繋げて考察するために、韓国の歴史的教育実践例である「花郎」を取り上げる。「花郎」に注目する理由は、第一に、身体感性論の発露として、古代のアジアの思想や実践を取り上げているシュスターマンに倣ったことである。第二に、花郎は身体感性論と重なる特徴を持っているからである。第三に、花郎の教育的意義を問い直すためである。第3章では、身体感性論の視点から、花郎が行った身体教育や、そこで身体が含意しているもの—美、快、悦、楽、遊など—の可能性を探ることを試みた。

韓国の新羅時代（57B.C.～935A.D.）の制度・組織である花郎は、十代の若い男性の集団である。花郎は、兵士、宗教的集団、役人の育成・選抜のための集団、倫理的モデル、教育制度などの多目的組織であり、新羅は花郎を、王権の確立と強化、領土の拡張などに積極的に活用し、花郎は新羅の三国統一に寄与したと評価されている。

『三國史記』に、花郎の実践原理を見出すことができる。それらは「或相磨以道義 或相悦以歌樂 遊娛山水 無遠不至」であり、これらの実践原理における風流道、花郎の歌樂、花郎の巡遊の、身体感性論の観点から見える教育的意義を探ることができた。

第2節 風流道

風流道は、花郎が追求した共通の価値である。花郎の風流道は一般的に、儒教・仏教・道教が調和した思想として理解されている。この風流道の概念的解明に加え、花郎の実践原理としての美学的な側面に注目する必要がある。花郎は、風流道に従い、「美的人間像」を追求したと考えられる。それは、「表象の美」である外見の美に加え、生き方によって実践される「経験の美」を含むものであった。風流道の美的人間像は、身体感性論の改良主義として捉えられる教育の目的であった。

第3節 相悦以歌楽

花郎の歌楽の実践内容は、花郎の歌楽の起源となる「祭儀」での歌楽、花郎歌楽の「郷歌」、花郎の歌楽の特徴といえる「知の先駆」において考えられる。「八關會」祭儀における花郎の役割から見られる花郎歌楽の実践内容は、形式面で、音楽、歌、舞、劇、遊戯、武術が伴った総合的なパフォーマンスであり、内容面では、様々な要素を含む時代の反映であった。花郎の歌楽である郷歌の内容は、象徴的なものから実用的なものまで、幅広いものであった。花郎の歌楽は、花郎を美的な存在として昇華させる役割、花郎が追求すべき美的人間像の指針の役割をしていた。また、花郎の相悦歌楽の実践内容は、単なる余興としてではなく、高度の知的な活動として理解されるべきである。歌楽を創り、歌うことは、花郎の知識をさらに強固なものにするプロセスであった。また、これを郎徒、王、一般市民と共有することは、知識を伝達する一種の教材としての役割を果たしていたと考えられる。

花郎の「相悦歌楽」が持つ意義は、第一に、花郎の「歌楽」の特徴である総合性と連続性である。第二に、歌楽を「相悦」していたことへの注目である。これは、身体感性論における「快 (pleasure)」の意味とも通じる。シュスターマンは、快と知の関連性への孔子の洞察に注目し、身体感性による快の探求による生き方の改良を主張する。第三に、芸術教育の強調である。

第4節 遊娛山水

花郎の巡遊における「遊」は、修行の意味をも含む広い範囲で使われていた。従って、花郎の巡遊は、単なる娯乐的遊覧ではない、修行の重要な方法として機能していたと考えられる。例えば、心身の鍛錬、武術の修練、齋戒や祈りなどの宗教的修行、歌舞の修練、学問の修行などが考えられる。修行の意味に加えて、花郎の巡遊は、実用的な意味もあった。それらは、軍事・政治的な役割、新しい通路の開拓、地方の事情の把握、花郎に対する崇敬の念をもたらすイベントとしての意味などである。

花郎の「遊娛山水」が持つ意義は、第一に、「遊」「娛」の意味の再考を促す点である。これは、シュスターマンが再評価を求める「娯楽 (entertainment)」とその本質である「快」の多層性とも重なる。シュスターマンが挙げる快の五つの層位は、感覚の快、意味理解の快、非日常性の快、超越性の快、快の伝染性であり、花郎の巡遊にこれら快の層位を見出すことができる。第二に、花郎の身体経験の場となる「自然」の意義である。それは、一次的に美しい景観として心身の修行に重要な役割を果たし、さらに、神話の場所、民族の起源、国の領土、権力の拡張など、実用的な意味を持つ柔軟な学習の場であった。

終 章

第1節 研究のまとめ

第1章では、プラグマティズムとしての身体感性論の特徴が次のように明らかにされた。

- ① 個々人の生き方に接している。
- ② その出発点は、伝統的な学問としての美学の限界を乗り越える新しい美学である。
- ③ 反基礎づけ主義を標榜し、知識の根源性や確実性としての真理を否定する。
- ④ 身体が求心的な役割を果たしている。
- ⑤ 改良主義を目指している。それは、身体的実践を通しての生き方の改善である。

第2章では、身体感性論の基本原則である改良主義の観点から、教育の本質である改良主義に以下のような提言がなされる。

- ① 教育には改良主義が前提されていること、の自覚が求められる。
- ② 教育における改良主義は、反基礎づけ主義に基づく必要がある。
- ③ 教育における改良主義は、個々人の身体的経験を基盤とすることが求められる。
- ④ 教育における改良主義は、ペシミズムを踏まえた、オプティミズムへの信念の行為であることが求められる。

第3章では、身体感性論の「実践」の軸の観点から、身体感性論と教育との接続が試みられた。身体感性論を教育という実践として具現した例として、韓国の歴史的实践例「花郎」を取り上げた。花郎の実践は、風流道という、その時代が追求した美的人間像の理念を基に、「歌楽」「巡遊」の実践を行うことであった。それら実践の主要な要素として、総合芸術、知の探求、修行、実用が挙げられ、遊、悦、楽などの身体的経験が中核をなしている。

これらを総合して、身体感性論が教育に与える意義を以下のようにまとめることができた。

- ① 教育における反基礎づけ主義の原理の主張。
- ② 実践と学問の連動を求めること。
- ③ 教育における「身体」の可能性の再考を促すこと。
- ④ 教育は、改良主義を前提にしていることを受け入れ、身体的経験と行為を中心に改良主義の方向性を進めること。

これらの意義から芸術教育の可能性や、マインドフルネス活動の有用性への再考を求めることや、反基礎づけ主義の原理と関連し、現行の学校教育に教科横断型の授業、主題中心の授業の実施を求めることが示唆された。

第2節 今後の研究課題

今後、現代の教育の主流である学校教育における実践を、本研究で見出された身体感性論の教育的意義に照らして評価・分析することが求められる。また、身体と知、芸術と知を結びつける、教育実践の可能性について具体的な研究が求められる。本研究で見出された身体知識の深い関連性から、身体知の研究、認知科学などの先行研究を基に、その関連性を具体化させることが求められる。

IV. 主要参考文献

- 崔光植「新羅의 花郎徒의 風流道」『史叢』高麗大學校歴史研究所、87、2016、pp.1-34.
- デューイ, J. (河村望訳)『経験と自然』人間と科学社、1997。(Dewey, J. “Experience and Nature.” In *John Dewey: The Later Works (vol.1)*. Southern Illinois University Press, 1984.)
- 藤川信夫『教育学における優生思想の展開－歴史と展望』勉誠出版、2008。
- 一然 (李民樹訳注)『史記遺事』乙酉文化社、2013。
- 出原泰明編『中村敏雄著作集 1』創文企画、2007、1-9 頁。
- ジェームズ, W. (今田寛訳)『心理学 (上・下)』岩波書店、1992。
- 金富軾 (鄭求福ほか訳注)『訳注三國史記 1・2・3』韓国学中央研究院出版部、2012。
- 金相鉉「新羅時代の 花郎認識」『韓国古代史研究』71、2013、pp.207-237。
- 樋口聡『身体教育の思想』勁草書房、2005。
- 樋口聡編著『教育における身体知研究序説』創文企画、2017。
- Johnson, M. *Embodied Mind, Meaning, and Reason: How our bodies give rise to understanding*. Chicago: The University of Chicago Press, 2017.
- 増井三夫「読書する農民－プロイセン近代民衆啓蒙史像の再検討」『上智教育大学研究紀要』14 (2)、1995、495-507 頁。
- 関周植「韓国の古典美学史研究：風流の思想の展開」博士論文、東京大学、1997。
- マーフィー, J, ローティ, R.(高頭直樹訳)『プラグマティズム入門－パースからデイヴィドソンまで』勁草書房、2014。
- 佐藤学『学びの身体技法』太郎次郎社、1997。
- シュナイダース, W. (村井則夫訳)『理性への希望－ドイツ啓蒙主義の思想と図像』法政大学出版局、2009。
- シュスターマン, R. (樋口聡・青木孝夫・丸山恭司訳)『プラグマティズムと哲学の実践』世織書房、2012。(Shusterman, R. *Practicing Philosophy: Pragmatism and the Philosophical Life*. New York and London: Routledge, 1997.)
- Shusterman, R. *Practicing Philosophy: Pragmatism and the Philosophical Life*, New York and London: Routledge, 1997.
- Shusterman, R. *Pragmatist Aesthetics: Living Beauty, Rethinking Art (2nd.ed.)* . New York: Rowman and Littlefield, 2000.
- Shusterman, R. *Body Consciousness: A Philosophy of Mindfulness and Somaesthetics*. New York: Cambridge University Press, 2008.
- Shusterman, R. *Thinking Through the Body: Essays in Somaesthetics*. New York: Cambridge University Press, 2012.
- Shusterman, R. “Somaesthetics and Education.”『広島大学大学院教育学研究科紀要第一部(学習開発関連領域)』51、2003、17-24 頁。(樋口聡「学習論として見た「身体感性論」の意義と可能性」『広島大学大学院教育学研究科紀要第一部(学習開発関連領域)』51、2003、9-15 頁)
- 苫野一徳『どのような教育が「よい」教育か』講談社、2011。
- ウェスト, C. (村山淳彦・堀智弘・権田健二訳)『哲学を回避するアメリカ知識人－プラグマティズムの系譜』未来社、2014。